

多賀城市

さんのういせき いちかわばし いせき

山王遺跡・市川橋遺跡

平成25年度 発掘調査現地説明会

平成25年7月21日（日）午前10:30～

（見学は15:00まで）

【調査要項】

- 遺跡名 山王遺跡・市川橋遺跡
- 所在地 多賀城市南宮字八幡・市川橋字伏石ほか
- 調査理由 三陸沿岸道路仙塩道路4車線化建設工事、（仮称）多賀城インターチェンジ建設工事
- 調査主体 宮城県教育委員会
- 調査担当 宮城県教育庁文化財保護課
（山形県・群馬県・奈良県・岡山県・香川県・山口県・熊本県・宮崎県・京都市から職員派遣）
- 調査期間 平成25年4月8日～12月末日（今年度の予定）
- 調査面積 約14,500㎡（本発掘調査）
- 調査方法 遺構を完掘する調査（橋脚部）：約1,500㎡
遺構の平面確認に留める調査（盛土部・ループ内）：約13,000㎡
- 調査協力 国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所、多賀城市市民経済部農政課

1. はじめに

さんりくえんがんどろ

現在、多賀城市内では三陸沿岸道路の整備が進められていますが、その一部が山王遺跡・市川橋遺跡にあたるため、工事に先立ち、4車線化部及びインターチェンジ部を対象に、平成24年3月から発掘調査を行っています。

ふっこうどろ

また、三陸沿岸道路は「復興道路」として早期完成が期待されているため、当教育委員会では、発掘調査基準の弾力的な運用（調査は遺構が工事によって壊される範囲に限定するなど）、他の県・市職員の応援による調査体制の強化などによって、調査の早期終了に努めているところです。

2. 山王・市川橋遺跡の概要（第1図・第2図）

両遺跡は過去の周辺の調査から、弥生時代には水田が広がること、古墳時代には微高地に集落がありその周囲は水田が広がること、平安時代には基盤目状の街並みが形成されたこと、鎌倉・室町時代には屋敷が点在していたことなどが明らかになっています。

むつこくふたがじょうあと

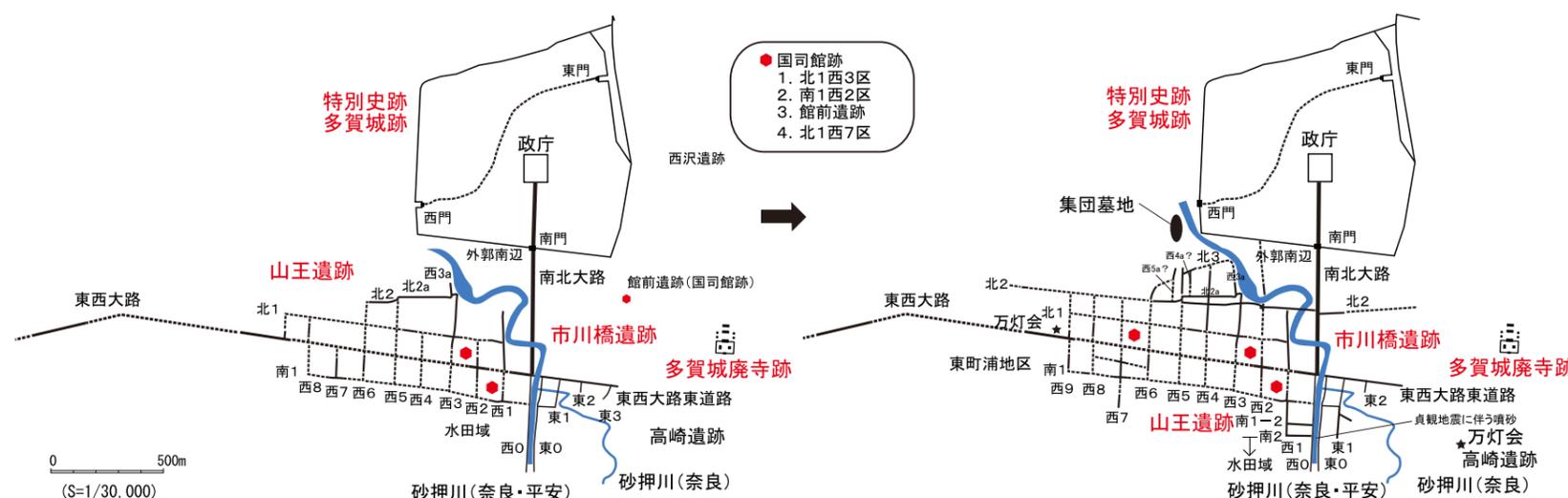
特に注目される時代は、遺跡北東部の丘陵に位置する陸奥国府多賀城跡が機能していた奈良・平安時代です。多賀城政庁の中軸線に乗る南北大路と、外郭南辺と平行する東西大路を基準に、道路網が段階的に整備され、基盤目状に区画された街並み（1つの街区が約100m四方）が形成されたこと、大路沿いの街区は公的な施設や上級官人の邸宅、大路から離れた裏手の街区は、下級役人や庶民の居宅、様々な工房（漆工房や鍛冶工房など）となっていたことが明らかとなっています。

だざいふ

こうした大きな街並みは平城京や平安京、大宰府など当時でもごく限られた場所にしか造られておらず、古代国家のしくみや、街並みに住む多種多様な人々の暮らしぶりを解明する上で、貴重な知見を提供してくれています。



第1図 遺跡とその周辺の航空写真



9世紀初頭頃～貞観11年(869)〔方格地割Ⅱ期〕

貞観11年(869)～10世紀前葉頃〔方格地割Ⅲ期〕

第2図 多賀城の街並みのうつりかわり

※多賀城の街並みにおける道路名と街区（区画）の表記

◎道路（小路）の名前は、幹線道路である南北大路と東西大路を基準とし、そこからそれぞれ南北、東西方向へ道路何本分離れているかで表記します。

（例）北3道路→東西大路から北に3本離れた道路。 西5道路→南北大路から西に5本離れた道路。

◎街区（区画）の名前は、東西大路から北では、街区の北西隅で交差する2本の道路を用いて表記します。

（例）北3西5区→北西隅は北3道路と西5道路が交わる場所。

3. 調査の成果

今回公開する調査区は三陸沿岸道路の東のL区と西のM区の2箇所^{いこう いぶつ}で、発見した遺構と遺物の多くは、古墳時代後期と奈良・平安時代のものです。個々の遺構の詳細な時代が不明確な部分もありますが、過去の周辺の調査成果^{あわ}と併せて、調査成果を記述します。

【古墳時代後期（6世紀末～7世紀中頃）】

堅穴住居^{たてあなじゆうきよ}と河川を発見しました。主な遺構はL区の東に分布しており、河川両岸のほとりである微高地^{びこうち}に多くの堅穴住居がつくられていたと考えられます。

また、この集落のゴミ捨て場とみられる河川からは、非常に多くの土器・木製品・骨角製品・動物の骨^{かいがら}などとともに、普通の集落ではみられない仏具である木製漆塗の柄香炉^{こっかくせいひん うるしぬり えごうる}も出土しています。こうしたことから、この集落は当時の仙台平野に点在する集落を代表するような、拠点^{てんてき}的な集落であった可能性が高いと考えられています。

【奈良・平安時代（8世紀～10世紀）】

道路、堅穴住居、掘立柱建物、材木堀、井戸、溝、土坑（穴）などを発見しました。

奈良時代には、道路は建設されておらず、溝・材木堀に囲まれたやや西に傾く長方形の区画の中に、堅穴住居や掘立柱建物などがみられます。

平安時代になると、碁盤目状の街区^{ごばんめじょう}（約100m四方）が徐々に整備されていきます。今回、西4～6道路、北3道路のほか、「北3西5区」を南北に2分割する溝などを発見し、街区の一つである「北3西5区」の規模や構造を明確にすることができました。また、西5道路の約35m西側と東側でも道路を発見しました。その位置や道路の方向から、この道路はそれぞれ西4道路と西5道路の間道である「西4a道路」、西5道路と西6道路の間道である「西5a道路」となる可能性が考えられます。

一方、「北3西5区」（L区・M区東部）、「北3西6区」（M区西部）、北3道路より北、の3つの場所の遺構の分布を比べると、北3道路から北には遺構が分布せず街区が形成されなかったこと、「北3西6区」よりも、「北3西5区」に遺構が密集^{みっしゅう}していることなどが分かります。さらに各街区内をみると「北3西5区」では東側に堅穴住居、中央に掘立柱建物、西側に小溝（畑）が分布していること、南北に2分割する溝より北の区画の方が掘立柱建物の規模が小さいことなどが分かります。

以上のように、各街区及び細分された区画において、遺構の分布や建物の規模等に違いがあることが明らかとなりましたが、これは各街区の土地利用や、住む人々の地位などが異なっていたことなどを反映しているものと推定されます。

4. おわりに

今回、古墳時代の集落と河川、奈良・平安時代の集落と街並みの一部を発見しました。特に平安時代では、多賀城南面に広がる街区のうち「北3西5区」と「北3西6区」を調査し、街並み北部の街区の規模や、街区内部の様子をより詳細に知ることができました。今後は、今回発掘した街区の南部と西部にあたるJ・N区を調査する予定となっており、多賀城の街並みの広がりや街区の構造をさらに解明していきたいと考えています。

上空から見た調査区



調査区全景（西から）



真上からみた調査区（上が北）

発見した遺構と遺物



河川と堅穴住居群（南から）



河川などから出土した古墳時代後期の土器



堅穴住居（南東から）



材木の跡

※断面観察のため縦半分を掘り上げ

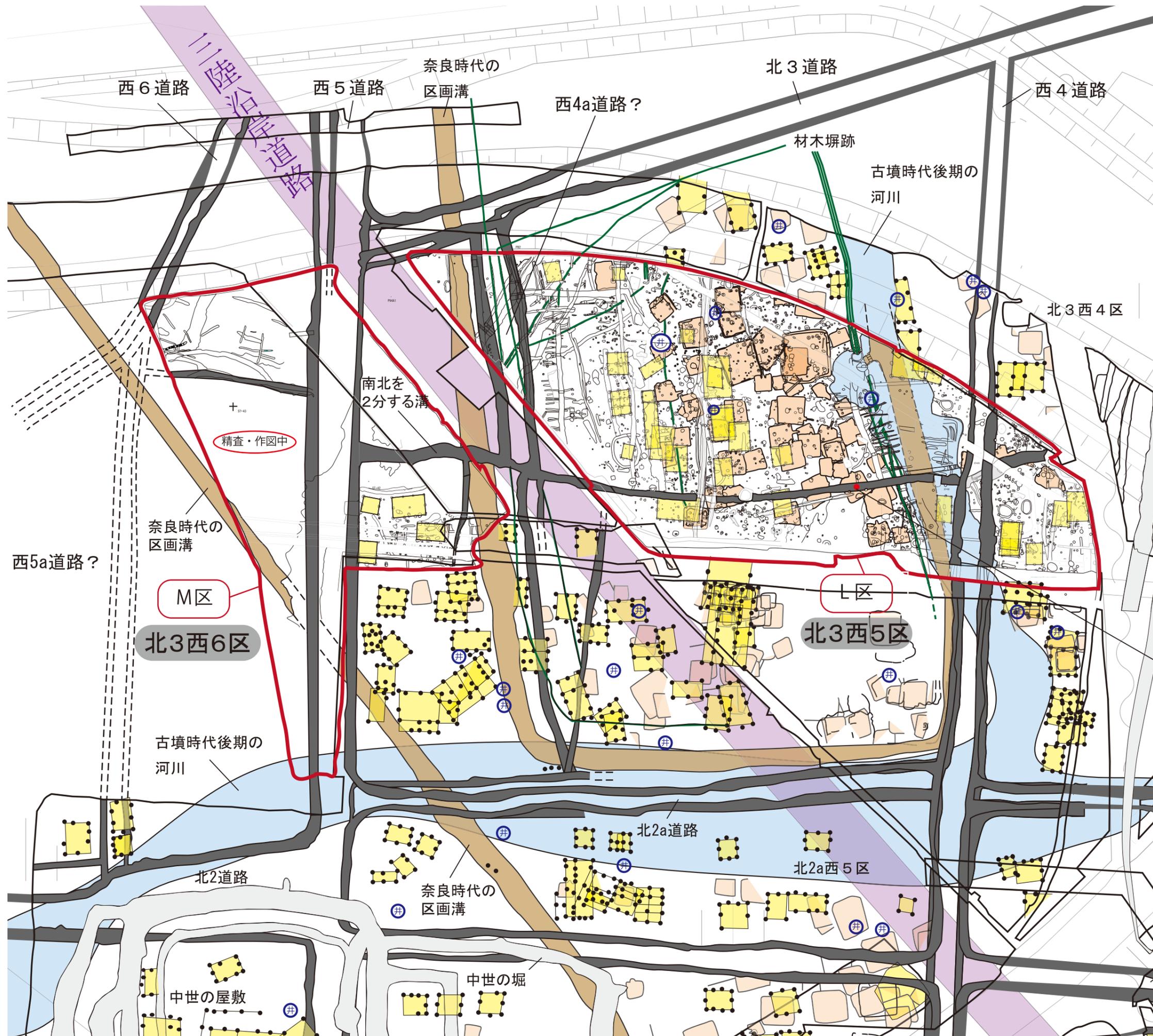
材木堀（材木を立ち並べて堀にしています）



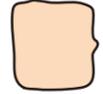
鳥形の頭部



土師器の甕



【凡例】

-  竪穴住居
-  掘立柱建物
-  材木塀
-  井戸
- 溝**
-  奈良時代（区画溝）
-  平安時代（道路側溝・区画溝）
-  鎌倉・室町時代（堀）

鳥形の頭部（土製）出土地点



第3図 遺構配置図